

<序論>

研究動機・研究目的・研究方法

ハンドボールは、1チーム7名のプレーヤーで構成され、攻撃と防御を繰り返し制限時間内に敵チームよりも多くの得点をあげたほうが勝者となる集団スポーツである。数的有利な状況を作り出すことが攻撃の課題である。筆者は大学4年間で洗練された集団戦術を学ぶなかで「ハンドボールは1対1に始まり、1対1に終わる」という基本に戻り、個人戦術の重要性を改めて考えた。ハンドボールが人々を魅了する1つの理由は、人間の最も器用な手でボールをコントロールし、空中で繰り広げられる多彩なシュート場面にあると考える。そのためには、個人戦術であるフェイントを使い、1対1の突破を成功させ攻撃を有利に展開させなければならない。筆者はゲームメーカーとしての役割を果たすために、攻撃の起点を作りつつも、突破を狙い、運動の側面から人間と人間の関係が強く現れるフェイント行為について理解を深めたいと考えた。

研究目的は、既存のフェイント構造体系を検討したうえで、実際のフェイントを類型化し、典型的なフェイントの構造特性を明らかにしていく。さらには、そこで見出された新たな課題から既存のフェイント構造体系に示唆を与え、今後の競技生活に生かすとともに、指導の面でも生かせるものにしたいと考える。その方法は、マイネルの運動学における運動モルフォロジー的考察法を用いて、印象分析により運動を客観的にとらえるものとする。具体的には、ハンドボールに主導的な諸国のフェイントの構造体系を把握した後、筆者の大学4年間とヨーロッパ選手権(2005・2007)のU-17・19における試合を原資料とし、典型的場面として把握できるフェイントを考察場面として抽出し、分析・考察を行うこととする。

<本論>

第一章 ハンドボール競技の構造特性

ハンドボールは、スポーツの特徴を良く表している身体能力、専門的な技術、戦術上の知識を結合させたものである。身体的基礎である走る、跳ぶ、投げるなどの自然な人間の運動要素のうえに、特徴的技術がつくられ、攻撃や防御のために専門化される。ここでは、ハンドボール競技の特性についてまとめ、1対1の突破状況における個人戦術に焦点を絞り研究を進めていく。その中でも、重要な構成要素として“フェイント”について言及している。フェイントは、相手の動きに応じて動く、相手を自分の思うように動かす「対応動作」が必要とされる。

第二章 ゲームの運動観察方法について

本研究では、試合分析の中から、運動モルフォロジー的考察を用いることにしている。その際、呈示した4つの観察法から、自由観察法およびフィルム・ビデオによる観察法を

用いて考察していく。他者観察の不可欠な前提条件となる印象分析を行い、マイネルによる「運動リズム」「運動の先取り」「運動の局面構造」の3つのカテゴリーを中心に運動構造を理解していく。その際、モルフォロジー的運動分析はつかのまの印象分析のなかに隠されている事実や徴表や関係を確認させてくれる。印象分析の際には、より客観的な運動観察を行うために「共同観察」によって研究を進めた。

第三章 ゲームにおけるフェイントの構造体系

この章では、ドイツ、デンマーク、ハンガリー、わが国の代表的なフェイントの構造体系を比較、検討したうえで印象分析によってこれらの既存の構造体系に示唆を与えた。印象分析により、抽出した5つの典型的な場面は、ストライドストップフェイント、シュートフェイント、回旋フェイント、ゼロステップフェイント、回転フェイントである。それらを「運動リズム」「運動の先取り」「運動の局面構造」を基に類型化し、既存の構造体系との比較から新たな課題を見つけ、以下のことを示唆できると考える。

- ・ ステップシュートフェイントの際には、ボールを左から右への持ち替えによりディフェンスから遠いほうでドリブルを付くため、カットされにくい。
- ・ ジャンプシュートフェイントの際には、5ミリジャンプをすることにより、シュート動作から突破への移行が速くなる。
- ・ 回転フェイントの際には、ゼロステップと組合せることにより、オーバーステップを回避することができ、両脚踏み切りからの切り返しが速くなる。

<結論>

本研究では、フェイントを運動学的視点からとらえることによりフェイントの構造特性を明らかにすることができた。フェイントとは、位置取りから突破に至るまでの一連の行動をいう。本研究ではフェイク動作に視点をあてて類型化しようとした。その為には、まず構造論をとらえなくてはならない。構造論とは、運動の本質を見抜くことである。初心者と世界レベルの選手がシュートフェイクを行ったとする。この2つのフェイクは出来栄に差が生じていても、同じシュートフェイクなのである。なぜならば、同じ運動を身に付けているからである。このことは、シュートフェイクに欠かすことができないシュート動作をしっかり行い、ディフェンスを騙そうとしていることからいえよう。さらには、カテゴリーを用いた共同観察により、間主観的な運動を観察することで、より客観的な運動を観察することができた。本研究では、構造論に重点を置き進めてきた。その結果、運動の“本質”を見抜き“運動の正しさ”を身に付け、指導者としてそれを伝えていくことの重要性を感じた。マイネルの8つのカテゴリーは、良い運動つまり“正しい運動”の徴表である。今後の課題としては、共有できるものの少ない既存の構造体系を今回の研究で明らかにした視点でより明瞭にしていきたいと考える。

(引用・参考文献省略)